

## 座談会 「ICU 日本語教育の歴史と未来」

### [ 出席者紹介 ] (敬称略)



今田滋子 (いまだ しげこ) (写真前列中央)  
広島大学名誉教授。専門は日本語教育学、日本語音声学等。ICU 卒、同大学院教育学研究科修了。ICU 教授を経て、1990 年広島大学教育学部へ。ICU、早稲田大学、広島大学、姫路獨協大学等で教鞭をとる。

堀口純子 (ほりぐち すみこ) (前列右)  
明海大学外国語学部教授 (2004 年4月より桜美林大学大学院教授)。専門は日本語教育学、会話分析。ICU 卒、ハワイ大学大学院修了。ICU 助手、筑波大学助教授を経て、明海大学へ。ICU 助手時代より日本語教育に携わる。

広瀬正宜 (ひろせ まさよし) (2列目右から2人目)  
ICU 教養学部教授。ICU 卒、同大学院教育学研究科修了。カリフォルニア大学バークレー校で Ph.D 取得。バークレー校および ICU 等で日本語教育に従事。

垣貫 ジョン (かきぬき じょん) (2列目中央)  
弁護士。ペーカー & マッケンジー外国法事務弁護士事務所勤務。カリフォルニア大より1年本科生として ICU に留学後編入。1979 年 ICU 卒。日本で就職後、84 年にカリフォルニア大ロースクールを修了、弁護士となる。現事務所のサンフランシスコ、ニューヨーク事務所勤務を経て、94 年より東京事務所に勤務。

容 應黄 (ゆん いえんゆ) (前列左)  
亜細亜大学経営学部経営学科教授。専門は国際関係論、国際関係史、中国近代史。1969 年 ICU 卒。71 年にコロンビア大学で修士、81 年に東京大学大学院社会学研究科で博士号取得。国立シンガポール大学日本研究科、イェール大学を経て、89 年より現職。

司会: 稲垣滋子 (いながき しげこ) (2列目左から2人目)  
元 ICU 教授。専門は日本語学・日本語教育。東京都立大学大学院修了。1964 年から 2002 年まで ICU で教鞭をとる。他、ブラウン大学、モスクワ大学等で日本語教育に従事。

コメンテーター: 中村妙子 (なかむら たえこ) (2列目左端)  
元 ICU 教授。専門は日本語学・日本語教育。ICU 卒、同大学院教育学研究科修了。1960 年から 2002 年まで ICU で教鞭をとる。

司会 本日はお忙しい中、この座談会のためにお集まりいただき、ありがとうございます。ICU では 1953 年、開学と同時に留学生のための日本語クラスが始まり、今年でちょうど 50 周年を迎えます。初級、中級、上級の集中コース、一年本科生のコース、帰国生のコース、日本語教授法コース、さらに夏のコースなど多彩な授業が行われてきました。その間卒業生や修了生がたくさん出ております。こうした歴史の節目にあたり、今日は ICU で日本語を教えた先生と、そのクラスをとった方々が、一つのテーブルを囲んでいろいろ話し合おうという集まりを計画いたしました。ICU 時代とその後のご経験の中で感じた楽しかったこと、つらかったこと、また ICU の日本語教育はこうあってほしいというようなことなど、忌憚のないお話をお願いいたします。

### ICU 時代のこと

司会 初めに、ICU 時代で何か印象に残っていることがありましたら、お話しください。

今田 その前に一ついいですか。本来ならここにいらっしゃるはずの小出先生が 50 周年の行事を待たずに、去年の 3 月にお亡くなりになったのは残念です。もうちょっと長生きして下されば 50 年のこういうところにいらしてご存知のことをいろいろお聞かせくださったのじゃないかと思います。

- 容 私は小出先生にシンガポール大学の時にお目にかかったことがあります。ちゃんと私のことを覚えていてくださっていました。
- 今田 私がICUで最初に日本語教育に携わることになったのは小出先生がいらっしゃったからなんですね。私は小さいときから英語が好きだったので、英語の先生になりたいと思ってICUに入ったんです。そうしたらアドバイザーが小出先生で、「あなた日本語教育やんなさい」と例の口調で言われて。すごく悩んだんですが、何かありそうだとということで始めました。小出先生との出会いが私の運命を変えたといっても言い過ぎではありません。ICUでも先生にはずいぶんお世話になったんですが、姫路独協大学でもお手伝いできて、その時先生はすごく喜んでくださったんです。
- 堀口 私はICUに入った時はまだ大学院を出てすぐでしたので、学生さんの半分ぐらいは私よりも年上でした。そういう中で毎回毎回緊張しながら教えていたという思い出があります。私がいた時に、教科書問題が起こりました。教科書のある部分を、主に日本人学生が取り上げて、それについて先生方に意見を聞くということが続いて。その部分を、なぜ教科書で取り上げるのか、それをどういう気持ちで教えているのかなど、いろいろディスカッションがあったと思います。私は、毎日毎日の教材準備とか、教えることで精一杯でしたが、日本語教育というのは非常に大きなものを持っているんだなあ、と思い知らされました。
- 今田 結局、教科書のその部分は削除して使ったと思います。
- 堀口 「日本の国は今では台湾と樺太と千島、朝鮮などを失いましたが」という部分だったと思います。
- 容 教科書で私が覚えているのは、1学期目がローマ字だったということ。とても不思議でした。自転車に乗るのに、まず三輪車を習わなくてはならないような。特に私たち漢字圏から来た学生は、疑問に感じました。例えば新宿の国際学友会は、いきなり平仮名から入るのに、ICUはローマ字から入って。1学期ぐらいですよ。
- 今田 いえ、1学期の半分です。教科書のPart Iが40課あって、20課までがローマ字でした。実は、ICUで教科書を作る時、小出先生は最初から日本語表記になさりたかったのですが、当時の語学科のアメリカ人の先生方に、アメリカ人のような英語圏の学生はいきなり日本語表記では難しすぎるので、最初はローマ字の方がいいという強力な意見があり、やむを得ず歩み寄って、半分だけローマ字にしたんです。
- 容 確かに非常に英語圏の学生を中心とするプログラムというふうには感じていました。
- 今田 そうですね。香港の人達も英語ができましたし、英語のできない人達は日本語の授業が取れなかったんですね。まず、英語を勉強してから日本語を取るということで、実際にそういうやり方をした人も何人かいますね。その人は他の学生の倍ぐらい時間がかかっていますね。
- 垣貫 私の経験は逆でした。毎日たくさんの漢字を覚えなくてはいけないので、毎晩図書館に行って原稿用紙に漢字を書いて必死に暗記しました。でも、アメリカの大学で同級生が受けている日本語の授業は、1年目が全部ローマ字なんです。平仮名、片仮名はほとんど使わない。彼らと比べて、私は最初おくれていたんですが、毎晩漢字を勉強したことで追い越したんです。結局彼らはずっとローマ字で日本語を覚えていましたから、我々のように漢字からスタートした人より、しゃべるのは速くできていたけれど、その後の上達は私達の方が早かった。結局今思えば、その妥協案が一番いいのではないかと思います。現在、私の妻はフィリピン人で、日本語の会話はかなりできますが、字はほとんど読めないんです。ですから、ICUのように漢字圏からきた学生とそうでない学生と一緒に勉強している場合は、その中間をとらなければならないんですね。
- 今田 その辺、今はどうなっているんですか。
- 広瀬 基本的に、最初から漢字仮名混じりです。それに小さい字でローマ字の振り仮名をつけています。「振りローマ字」ですか。4課までそうなっています。
- 今田 ICUは欧米圏の学生、香港も含めて英語ができる学生が中心だという特殊性があるから、そういうことがあるんでしょうね。今アジアの学生が増えていますから、他の機関ではまた別の方法をとっていると思います。

容 私の年は Intensive Japanese の授業をとる学生が多かったんです。ずっと外国育ちの帰国生で、書けないけれど、しゃべれば日本人と変わらない人達や、ミッションナリーみたいな、20年以上日本に住んでいるような人達が、一緒に授業を受けていました。みんな非常に日本語ができるんです。また、アメリカの Junior Year Abroad のプログラムで来ている3年生の人達、彼らも日本語を勉強したことがあるんです。そんな中で私たち香港からきた7人と、タイの学生は初めてで全然できなかったですね。最初の頃は本当に憂鬱でした。すごく程度の差があって、必死でした。寮に帰っても日本語を勉強して、それが逆転したのは2学期ですね。漢字がたくさん出てきてから。でも、タイの学生は本当に大変でした。1学期と2学期の間にクリスマスの休みがあって、第四女子寮で悪夢を見たんですが、それが平仮名と片仮名が石みたいに降ってくる夢でした。まず夢をみて、次に熱を出して。それが治ったら開き直って、全て楽になったというふうに思います。楽しい学生生活を送れるようになったのは2学期からです。3学期になると逆にアメリカ人達に漢字の書き方を教えました。書き順の違いなど。それは楽しくなりました。そういう記憶ですね。



今田 今でいう対象別教材、対象別教授法というのが、理想的には、欧米系の学生さんと香港系の学生さんとに別々にあったほうがよかったですけれど、当時はそこまで贅沢が許されない状態だったんですね。

容 でも、今考えればよかったです。漢字を書くときはほっとする。あとの時間は全て緊張して。本当にクラスで一番できないグループだから。他の人は皆ペラペラしゃべっているのに、「何？」とか。

今田 わかります。私も外国語を習うときに、他の人はペラペラ答えているのに、こっちは「え、何？」って。あれはつらいですね。

容 だから漢字のライティングのクラスだけは息抜きでした。

垣貫 私は第二男子寮に2年間住んでいたのですが、非常に親しくしていた香港の学生がいて、よく一緒に勉強しました。彼がおくれているところと私がおくれているところが全然違って、僕は彼に動詞の使い方とかイントネーションとかを教えて、彼は僕に書き順とか漢字の形が変だとか、そんな英語のように斜めにはならないとか教えてくれました。日本語の勉強だけではなく、お互いの国際関係のいい勉強になりました。他にアフリカの学生もいました。

今田 それができるのがICUのいいところなんですよ。

垣貫 アフリカの学生がいて、あとは日系人がいて、香港の学生がいて。この時、我々4人は仲が良かったんです。結局、国に帰らないで残ったのは3人、私の他にあと2人なのですが。

容 Intensive Japanese を取った学生達は仲間意識がすごいんですね。3年からバラバラになっても。1年の時は毎日一緒だったから。

広瀬 それは今でもそうですね。ものすごい仲間意識がありますね。

今田 Intensive Japanese の授業を取っている学生の中には途中で精神的に耐えられなくなってくる人達がいるんですね。そうすると、カウンセリングみたいなことが必要になるんです。私たちはそういう勉強をしていませんので、ただ聞いてあげるのが精一杯だったのですが、幸いなことに若かったのも、先生というより友達として聞いてあげることができたんですね。小出先生にはとても言えないけれど、私たち大学院生レベルなら言える、泣きながら話してくれるということがありました。私達も寮にいましたから。私は4年生の時は第一女子寮、大学院生の時はシブレーハウスにいましたので、そういう相談役で、試験の前などは夜中に質問がきて、大変でしたけれど。寮の部屋のルームメイトが一人はノンジャパニーズだったんですね。部屋ではルームメイトですが、大学では、私達はシニア・フェロー(4年生助手)として日本語を教えていて、向こうは学生だから友達だかなんかわからないという関係でしたが、何でも話してくれましたね。必要だと思



うことは小出先生に申し上げたりもしました。悩みが解決しないと勉強が手に付かない人もいますね。今はICUのカウンセリングシステムで専門の方がいらっしやと思います、当時はまだそれがなかったので若い方や先生方がそれを代わりにやっていました。

容 でも、先生方は本当に親切で、稲垣先生も中村先生も全然怖くなかったですね。怖いのは小出先生だけ。本当に別格。小出先生の授業の時は本当に緊張しました。

今田 ああ、そうですか。でもお年を取られてからは優しくなられましたよ。

容 そうですね。でも違う存在でしたね。

今田 ですから、質問はできるかもしれないけれど、勉強の方法についてや、漢字を書いても書いても忘れてしまいますというような相談はできないようでしたね。私自身も若いときは相談に来てくれていたけれど、ある時から来なくなったなというのは感じました。で、よく耳を澄ましていましたら、学生達が休み時間に「ちょっとお母さんみたいね」って言っているのを聞いたことがあるんですよ。こっちはショックだったんですけどね。

容 私が担当している国際関係論のクラスでも同じで、昔は冗談を言ったら、向こうは冗談だと思っていたのですが、最近は冗談を言っても向こうは真剣にノートをとっているんですよ。

今田 ですから、先生方も年齢的にもヴァリエーションが必要ですね。

垣貫 さっき今田先生が触れたことで、日本人とノンジャパニーズを寮の一緒の部屋にする、というのは理想としてはいいんですが、私は3年と4年の時にルームメイトが適切ではない人とあたってしまったんです。3年生の時は2人がいつも夜遅くまで酒と煙草とマージャンで、僕は毎晩図書館で勉強をしていました。彼らにはこういう熟語はどういう時に使うのかと聞こうと思っても聞けないんですよ。不真面目な人達だったので。

今田 面白いですね。アメリカに留学した日本人が言うようなことを、アメリカ人の垣貫さんから、日本人の学生について聞くというのは。

容 寮は結局そういうところですね。運もありますしね。

## 卒業後の日本語の生かし方

司会 次に、学生だった方々に伺いたいのですが、ICUで学んだことをその後の生活の中でどう生かして使えたか、あるいは生かすことができなかつたかということ、話していただけますか。

垣貫 私は学部は理科系でしたので、ロースクールに行ったら知的財産、要するに特許とや商標を専門分野としてやろうと思いました。私がやる商標関係の仕事の半分ぐらいは外国の企業の日本での問題で、残りは日本の企業の外国での問題です。例えば、自分の国で一般的に使われている言葉が、なぜ他の国で商標として登録されそのために他の人が使えなくなったのか、などの問題です。一つの例をいえば、日本の化粧品メーカーが「キャロット」という言葉をスキンケアクリームとして登録しました。それにニンジンエキスが入っているからです。でも、当然他のメーカーがクリームを作った場合はキャロットという表示ができなくなってしまいます。このような問題でも、私は毎日ICUで学んだ日本語、語学を使っています。「VとB」や「LとR」の違いで外国人からすれば似ていない言葉が、日本ではなぜ似ているのか、とか。そんな時、僕は当手下敷きで使っていたカタカナ表を見せます。それにローマ字をつけて。あなたの商標の「L」は「ラルルレロ」に該当して、「V」は「バビブベボ」に該当しているのだ、とか、よく仕事で使います。仕事は法律で、語学を教えたりするわけではないですけど、ここで学んだことはほとんど毎日生かしています。



今田 ちょっといいですか。私が上級日本語を教えている時に、彼はいい学生で「僕は将来、日本とアメリカのために働く弁護士になりたい」と言っていたんです。もう学生のときから、日本語を使って仕事をしたいと。そういう目的があるから、いい学生でしたし、それをまた実現したというのがすごいですね。なりたいという人はた

くさんいるけれど、達成する人は少ないかもしれません。垣貫さんのような学生を教えたことは嬉しかったことの一つですね。他にも何人かそういう人がいると思いますけれど、本当に嬉しいです。

**垣貫** ただ、私のあの頃の夢は、国と国との問題を調整するということを考えていたのですが、結局企業と企業との調整になりました。

**今田** 民間のそういうのも大事ですよ。

**司会** 広瀬さんは学生時代の垣貫さんも社会人としての垣貫さんもご存知ですね。いかがですか。

**広瀬** 以前、カリフォルニア大学パークレー校の同窓会があったのですが、すっかり立派になっているわけですよ。背広を着て、きちんとしていて、学生の時とは違って。それで「先生は相変わらずですか？」って。先日、それこそ商標のことでちょっとお手伝いをしたんですけど、現地の弁護士の方にちゃんとうまく日本語を説明していました。やはり外国人が外国人を教えるという教え方ができるんですね。何が一番ポイントかということなど。

**今田** お仕事の専門用語もありますし。

**垣貫** というより、あの事件では「ちょっと手伝った」とおっしゃったんですが、広瀬先生のおかげであの事件で勝ったんですね。面白かったのは、現地で我々の弁護士は中国人だったけれど漢字が全然わからなくて、そこから我々が教えてやらなければいけなかったことです。

**容** 私はICUの日本語がなかったら、今日の私はないと言えます。ICUでは日本思想史を勉強して、大学院からは日中関係史を専門として、ずっと日本語で文献を読んだり、研究をやったり、論文を書いたりしてきました。81年に博士号を取ってからはシンガポール大学の日本研究科に就職しました。とにかく人数が足りないから1年目の時に日本史を教えて、縄文時代から始まって、3年目の時には日本の政治・文化、当時の竹下内閣まで教えました。しかも日本語の授業もちょっと手伝いました。そして89年に日本に戻ってきて、亜細亜大学で日本語で国際関係論を担当して、日本語で生活しています。そういうわけで本当にICUで日本語を勉強して、私の人生の進路が決まりました。

**垣貫** 私は仕事の上で日本語ができる外国人と接しますが、ICU卒の人はすぐわかりますよ。日本語がきちんとしている、耳で覚えたためちやくちな日本語じゃなくて、ちゃんと基礎のある日本語をしゃべっているの、それがわかるんですよ。

## ICUの日本語教育への要望

**司会** それでは最後に、皆さまがICUから外にいらっしゃって、その外から見たICU、あるいは将来こうあってほしい、などについてお話ししたいと思います。

**堀口** 私はICUを出てもう25年ですので、教師養成の方は非常に良く見えるんですが、日本語の授業の方は本当に分からないんです。ですが、その分からないことが問題なのかというと、必ずしもそうじゃないと思います。例えば、さっきのお二人の話を聞いていて、二人がICUと分かった時に、ああ、やっぱりねと思うんですね。ICUの日本語教育が今こうだ、ということが見えなくても、そういうふうに、あるときその人がICUだと分かったときに、ああ、やっぱりね、と私自身が思えるということ自体がいいのだと思います。そういう形で見えるということも、いいのかなと思うんですよ。いつもいつもICU卒の日本語、ICUで日本語を勉強しましたという札をぶら下げている必要はないとは思うんですね。「日本語お上手ですね」と言われるようなのではなくて、そういうことも意識しないで、日本語を一つの道具として自由に使っていて、ふと話をしていたら、ああ、ICUなのと分かる、そういうのでいいんじゃないかと思うんです。そういう意味ではいい教育をしているんだなと羨ましく思います。外に出ているいろいろ他の苦勞をすると、やはりICUはいいなとすごく思いますね。

**今田** 一部、堀口さんに同感ですが、一部、私は違うところもあります。このお二人は素晴らしいんですけど、このお二人は私が知っている時代のICUの日本語教育の出身者なんですね。今どうなっていて、どういう学生



が出ているのかは、あまり分からないんです。ですから、さっきも問題提起がありましたけれども、例えば、依然として欧米系の学生対象の授業で、英語で文法を説明していらっしゃるのかなど、その辺のことをちょっと教えて頂けませんか。

**広瀬** 今の Intensive Japanese の授業では新しい教科書を使っていますが、文法説明は全部英語なんです。学生はそれを読んでくることが前提になっていて、授業では特に英語を使った説明を、最初はするかもしれないけれども、後はしていないんです。ターゲットとしては、やはり欧米系が中心になっているのかなと思います。それが ICU の強みなのかもしれないというか、そういう特色がありますね。

**今田** それは大学の方針でもあるわけですね。

**広瀬** ええ。でも、これからはどんどんアジアにも開いていこうとしています。交換留学生については、アメリカだけでなくヨーロッパも開拓しているし、ロシアからも取っています。、ヨーロッパと言っても、スウェーデンなど、今まで学生が来なかったようなところも、今開拓しています。そういった人達が一緒になって習っていく。そういう時に共通のコミュニケーション、説明の道具というのはやはり英語、というのが、この大学の特色じゃないかと思うんですよ。それがある意味で、能率を上げていることになると思うし。

**今田** それがさっきのお二人の話の基礎がしっかりしているということにつながるかもしれませんね。私もいろんなところで英語の説明が一切使えず、直接法で教えるという経験をしましたけれど、やっぱり速く進めないし、学生が本当に分かっているのかどうか確認しにくいという不便がありますね。多様な学生に対応するために何を教えるかより、どう教えるかというのが強調されていて、「何を」がちょっと軽くなってしまっている。その「何を」の中心が文法とか言葉、語彙などだと思うんですが。ですから、もし英語圏中心という学校の方針があってそれを貫けるとすれば、ある意味で国際社会のニーズの一部にしか対応していないということはあるんですが、その一部によりよく対応するということをプラスと考えれば、この路線もあっていいかなという気がします。



**広瀬** 先程、タイからの学生が大変苦労していたという話があったんですけど、この間チェンマイに行った時にその本屋さんで ICU の教科書のタイ語版を見ました。海賊版じゃないんですよ、きちんとしたルートのもんです。これからはそういうものも使えるようになってきたんだなと思いますね。中国語版とか。

**今田** 私の経験した範囲では、各国語版の文法説明や語彙リストとかがあって、「予習をしてらっしゃい」と言っても学生はほとんどしてこないですね。ですから遅々として進まないという印象をいろんな所で受けました。堀口さんがいらしたところはどうですか。

**堀口** クラスによって非常に違いがありますね。予備教育が、ICU の Intensive Japanese にあたるような集中度でやっていますが、そこでは学生達はかなり予習して来ます。けれども、目が大学院入試の方や、自分の専攻の方に向いている学生もいるので、必ずしも予習は期待できないということはあるですね。

**今田** ICU では私がいる間もちょっと変化は感じました。初期の、泣きながらルームメイトに精神的な相談とか内容的な質問とかしに來たりしていた学生たちよりは、だんだんある意味で大人になったのか、ある意味であきらめがよくなったのか、学生もちょっと変わってきたんです。特に Intensive のような集中コースでない、日本語コースの学生達の中には、ある時期、おそらく垣貫さん達の後だと思うんですけど、漢字拒絶症の学生が出てきました。「僕達 1 年しか日本にいないし、国に帰ったら漢字はいらないんだ」と言うんです。教授内容が学習者中心、学習者のニーズに対応するということに移りだした頃ではなかったかと私は思います。

**垣貫** 1 年間だけの勉強だから漢字は覚えなくていいという考え方は基本的に間違っていると思います。それは、要するに、英語をしゃべる人がフランス語とかドイツ語とかスペイン語を勉強しようとするのと同じような発想ですね。日本語は、ある程度のところまで行っても、漢字がわからないと、会話を覚えることだけに限っても、その時点から全然上達しないと思います。5歳とか幼稚園児の日本語になってしまうんですね。私は仕事でもいつも後輩にそう言っているんですよ。我々はバイリンガルの弁護士を毎年雇ってるんですが、以前

と比べて、読解力がどんどん落ちてきていますね。

今田 それは今どうなっているんですかね。

広瀬 いや、そこまでひどくはないですよ。漢字は絶対やらないという人はいないと思います。

今田 じゃあ、また持ち直したんですかね。

広瀬 漢字が嫌いな人はいるでしょうけどね。

容 私自身の経験ですが、ICUを卒業して日本語はまあまあだと言われるんですけども、その後苦労したのは敬語ですね。特に日本で生活するようになってからは。私の時には敬語の教育は不十分だったという失礼ですが。あるいは私が勉強しなかつただけかもしれませんが。ICUの中では通用するのだけれども、実際の日本の社会では通用しないんですね。

今田 ICUの日本人の学生もそう言ってるんですよ。

容 そうですか。(笑)

今田 私の同級生が東大に行って、「ねえ、先生」ってやってすごく叱られたことがあるんです。(笑)

広瀬 そんな昔もそうだったんですか。

今田 日本人もICUの教育を受けていくと、ICUの外で先生と対等に話をして叱られたりするんですね。だから、それは日本人と留学生の両方に言えるんでしょうね。でも、確かに敬語は一つポイントですね。

広瀬 そうですね。特に社会に出ていった時に。

今田 今の教科書は分かりませんが、昔の教科書では1つの課で敬語を全部教えますよね。あれは無理ですね。

容 そうですね。少しずつ導入しないと。

今田 それとシチュエーションがないとだめですね。口頭の文型練習だけじゃ本当にだめですね。

広瀬 今の教科書にはシチュエーションがありますよ。

垣貫 自分は丁寧語と普通の会話と敬語の使い分けを、ちゃんと教わったと記憶しています。こういうシチュエーションでこういう日本語が使われなければいけないという教育をICUでは受けましたから、それを現在生かしているつもりです。他の大学で日本語教育を受けた知り合いの中には、変にみんな飲んでる時に突然丁寧語で話し出して「何だ、これは」と思われたり、あるいはオフィスでミーティングをしている時にくだけた言い方をしたりする人がいて、この人はこういう言い方をしてはいけないということを誰にも教わってないんだなと思うことがありますね。敬語の使い分けがきちんとできる人は、私が知っている外国人には一人しかいないんですが、その人もICUで教育を受けた人なんですね。

今田 それは嬉しいですね。

司会 何かほかにご要望がありますか。

垣貫 そのまま教え続けるというのは昔の教科書をそのまま使うという意味ではなく、きちんとした基礎を教えて、流行にあまり左右されないということ、例えば、漢字は覚えなくていい、会話だけうまくなればよかった意見に影響されないで、きちんとした日本語を教えること、それを今まで通り続けていただきたいと思います。

堀口 私は ICU の日本語教育に何か要望するという立場でもないと思うんですけども、学習経験者からの声をもっと聞ける場があればいいと思います。今実際に日本語の授業を受けている学生が、ただただ苦しいとかこんな嫌だというふうになってしまいそうな時に、このような学習経験者からの声がかぼんと聞こえてくると、ある種の刺激、モチベーションにつながるかもしれないと思うんです。「先輩がこう言ってたよ」って先生が訓示的に言ってもそれはなかなかダメですね。ですから、今勉強している後輩たちが「ああ、そうなのか」と思うような機会があるといいなと思います。それは ICU だけじゃなくて、いろんなところでそういう声をもっと聞きたいと思いますし、先輩の声を聞いて、「そうか、やっぱりこれでいいんだな」と信頼して後輩がついていけるような気持ちになれるといいと思いますけど。



今田 それは実現できるんじゃないですか。先輩に話を聞く会みたいなのを持って。先輩もお忙しいと思いますが、来ていただいて生の声を聞く。今おっしゃったように間接話法はだめなんですよ。

広瀬 そうですよ。

今田 やっぱ生の声で、「今つらくてもきつとためになるから頑張れよ」と聞くのはいいと思いますよね。これはね、教授法についても言えると思うんですよ。私が関係した大学の場合、教授法の授業でそれをやっているんです。現場に出て日本語教育に携わって苦労した話を、1年に1回先輩を呼んで今の学生達に聞いてもらう。海外に派遣されて現地で教えると、頭で考えているのと違ってこういう問題があったよといった話を聞くんです。それは私たちが言うより何倍もインパクトがあるんです。任意の出席で単位に関係ないのにすごい出席率です。最近では学生自身がそういう会を自分たちで計画していますよ。話を ICU に戻しますと、英語で基本を与えて、基本的なことを大事にするというのは、ある意味で国際社会のニーズに対応するには狭くなりますけど、私は続けてほしいなと思います。もう一つ、フォーマルな会話とインフォーマルな会話、あれは残してほしいなと思いました。せめてテープでも。今も同じだと思いますが、学生達はクラスで習う日本語と町へ出て聞く日本語が違うということを時々言っていますよね。その違いを埋めるものとして、試験にも出さないけど、インフォーマルな会話の教材があるといいなと思うんです。今の教科書の補助教材としてテープを作って、ラボなどで聞かせるだけでもいいのではないかと思います。私の経験では、「試験には出さないよ」と言うのに、ラボでそこを聞いている学生が多かったですね。あれはなぜ聞かかという、役に立つからです。

広瀬 ええ、生で使えるからですね。

今田 そうなんです。それがなくなったというのはすごく寂しいです。だから是非復活してほしいと常々思っていました。自然体の町の日本語、もちろんイントネーションなんか自然体のものをお作りになったらどうですか。今ある教科書をかえないでもできるんじゃないですか。それができたらいいなと思います。

広瀬 今までのお話は主として日本語を母語としない学生を対象としたものですが、ここで ICU の中の Special Japanese という、帰国生対象のコースにも触れておきたいと思います。学生数は、少ない時でも 70 人ぐらいいます。レベルは、以前に金井先生がやってくださった時には一つしかなかったんですが、今はプログラ A、B、C と 3 つのレベルがあります。でも、時間数が足りないのが、僕は残念です。Academic Purpose の日本語教育で、日本語を使って論文を書いたり、発表したり等々ができるようになるためには時間が足りません。もう少し Critical Thinking とか、Study Strategy とかのやり方、発表の仕方等々、もっと統合的にできるようにすればいいと思います。これからはカリキュラムを作り直し、発展していくべきではないかと思います。そこが我々のノウハウを生かす一つの方法ではないかと思っています。



今田 外から見ると本当に ICU の帰国生は恵まれていると思います。ああいう手厚い対応をもらえる大学って少ないと思いますね。ですから、もっと時間を増やしてとか、それはある意味で贅沢なんですけれども、でもそこまでできれば、さすが ICU だという気がします。さっきおっしゃった敬語も入るんじゃないですか。

広瀬 はい、そうです。



今田 帰国生の人たちは家族との日常会話とかはできますけれども、社会に出て敬語を使って仕事をするところまでは今一つですね。

垣貫 敬語と言いますと、相手に対して謙譲語を使って自分について尊敬語を使ったりする人がよくいますね。

今田 今、日本人の若い人もそうなんですけどね。

垣貫 我々の事務所の中でもそういう人が浮いてしまいますね。

広瀬 Academic Purpose の日本語というものを能率的にやっていくためには何が必要かということを考えていく必要がありますね。研鑽を続けて、次の 50 年に向けてやっていきたいと思うんですね。

今田 それは、古くて新しい問題ですね。専門への橋渡しとかね。

広瀬 ええ、だから読解の教材ひとつ選ぶにもね、どういう目的で選ぶとかっていう。

今田 専門の先生方の協力がものすごく必要でしょう。先生方の意識改革から必要ですね。

容 たしかに、それは結構大きいですね。上級日本語の授業がそのまま他の授業で通用するかっていうと決してそうではないですね。

今田 で、専門はそれぞれ違うしね。日本語プログラムを取る外国人学生、教授法を取る日本人学生共に共通して外から見ていると思うのは、どちらも自分の考えをしっかり持っていて、それを母語、あるいは留学生の場合それを日本語でも表現できるということことです。そういう意味では、日本の文化からはちょっとはみだしている部分もあるんですけど、でも、いろいろなところで、自分の考えがあるのかなのかかわからないような人にもずいぶん出会いましたが、ICU 生の強いところはそれじゃないかと思います。これからはどこで何を勉強していても、それを ICU で勉強した人たちには大事にしていっていただきたいし、先生方もそういうふうに導いていただけたらよいかと思います。

司会 いろいろ刺激になるお話をありがとうございました。これから ICU の日本語教育が、今日伺ったようないろいろなことを土台にして、また発展していくことが期待できます。これからは是非そういうご意見などを寄せていただけるとありがたいと思います。

## コメント

司会 では、最後に今日の話聞いていた中村妙子さんから何かコメントをお願いします。

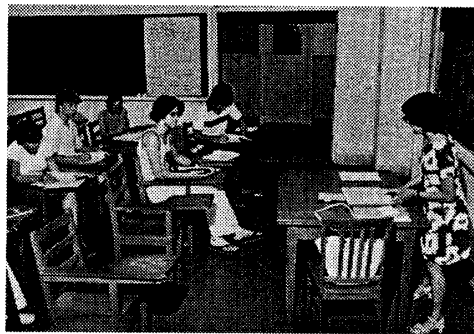
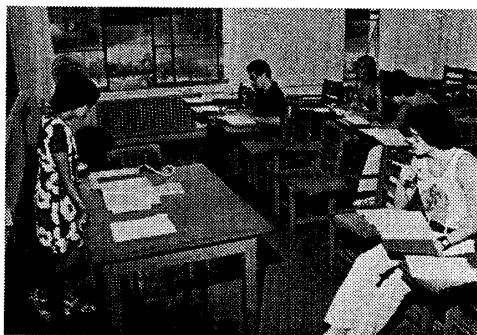
中村 今日の話に出てきたことへのいくつかの補足ですけれども、英語ができる人の話がありましたね。ICU はパイリンガルが建前で、大学の大切な理念としています。日本語か英語ができる学生を採るという方針があります。今アジアの学生など英語が母国語でない学生に対して、英語の力について前ほどきつくは考えてはいないと思いますが、やはり ICU の日本語教育では、大前提として英語が使えるということはいい点だと思います。それから、さっき容さんから、クラスの中に非常によくできる人たちがいて 1 学期間本当に辛かったというお話がありましたね。これは特に Intensive Japanese というコースの問題でした。ある時期から学生達があることを非常に問題にしました。そこで、Intensive のコースは、1985 年から、9月に全くゼロの学生と、中級から始める学生との 2つのコースを開講しました。これで容さんの問題は少し解消されたかなと思います。

それから、今日のお二人は非常に優秀で、ちゃんと日本語を仕事の場で使っている方達で、お目にかかれて私は非常に嬉しかったです。学生だった容さんが、亜細亜大学で教えているということが分かってしかも日本語を活用していらっしゃるのを知って、日本語を教えてよかったなと思います。垣貫さんのお話も伺って、基礎をきちんと勉強しろということを書いてくださる方がやはりいるんだと分かりました。漢字も含めて基礎が日本語を習得するためには重要なんだということを書いてくださったのを嬉しく思いました。



ICUは創立50年なんですけれども、やはり創設の時から年数を経て、その間にいろいろなことがあるんですよ。ICU自身もいろいろな変動を経て、いろんな意見のぶつかり合いがあったわけです。日本語教育に関して言えば、ここ10年ぐらいで大学の中で少しは認めてもらえて、日本語教育そのものに集中できるようになったかなと思います。現在は、日本の中で特にICUだけが日本語教育に関して優れているわけではないですよ。その昔はICUに来なければ日本語ができなかった時代もありました。また先程、さすがICUで勉強したんだってものが見えると言ってくださいましたが。現在競争の時代にあって、ICUはこれからどこに焦点を絞って日本語教育をやっていくのか、ICUがよその大学と伍してやっていく日本語教育とは何かということをごこれからの方にしっかり考えてほしいと思います。

(この原稿は、2003年3月15日にICUアラムナイハウス2階ラウンジにて行われた座談会を録音したものを、JLP事務室で文章化し、それを稲垣滋子がまとめ、さらに編集委員が書き直したものです。)



1977年の日本語コース授業風景(垣貫氏提供)